世界凧博物館 東近江大凧会館

東近江大凧の歴史

滋賀県東近江市では、大凧を作り、揚げる伝統が長い歴史を持っています。東近江市は琵琶湖の東岸に位置しており、広大な平野と湖から吹く強い北西風のおかげで、凧揚げに適した場所として知られています。

18 世紀初頭から、地元の人々は 5 月の「こどもの日」のお祝いで使うために凧を作り始めました。この祭りは子どもたちの健やかな成長と幸福を祝うものです。初めは小さな凧が作られていましたが、やがてより大きな凧を作る技術が発展しました。この制作技術の発展により、地元の芝原村、金谷村、中野村は、飛ばすことのできる最も大きな凧を作ることを毎年競うようになり、凧作りに競争の要素が加わりました。

19 世紀中頃には、これらの村の住民たちは今日の東近江大凧を作るようになりました。竹の骨組みに和紙を貼り付けて作られるこれらの大凧の多くは、約 100 畳（1 畳は 1.65 平方メートル）に相当する大きさですが、中には 200 畳ものサイズに達するものもありました。最大の大凧は 1882 年に作られ、約 240 畳（約 396 平方メートル）の大きさでした。

技術を称える

地元の人々は大凧作りの技術と技法をさらに磨き上げてきました。大凧は、竹の棒を格子状に組み合わせた骨組みで構築されます。縦方向の竹を取り外し可能にする技法が用いられており、この方法により大凧は「長巻き」（文字通り「長く巻く」の意）という形で巻き取って輸送や保管がしやすくなっています。また、「切り抜き」という工法も用いられています。これは和紙の特定部分を切り抜いて凧の空力バランスを向上させるものです。

1984 年には、「東近江大凧まつり」という祭りが始まりました。この祭りは、地元の人々が大凧作りや凧揚げを楽しむだけでなく、大凧作りの技術を次世代に伝えることを目的としています。この祭りは 2015 年まで毎年 5 月の第 4 日曜日に開催されていました。

さらに、1993 年には、近江八日市（現在の東近江）での大凧揚げの伝統が国の「重要無形民俗文化財」に指定されました。

展示を巡る

2 階には、日本の凧と世界の凧が展示されており、600 点以上のさまざまなデザインとサイズの凧が見られます。

博物館に隣接する別館では、大凧が製作されることもあります。製作中の大凧は、裏返しの状態で床に広げられ、竹骨や和紙の裏側に貼られた「幸運のメッセージ」を見ることができます。完成した凧は、その巨大なスケールと、製作にかかる膨大な時間と技術を鮮やかに示しています。この大凧は、東近江の人々にとって特別な意味を持つ、協力の結晶といえる作品です。